Japanese Journal of Applied Psychology
1994, No. 19., 109-116

展　望

中国大陸識字心理学の新展開

馬　文　駒*
（日本大学　今西凱夫 訳）

The Lastest Developments in Chinese Character Teaching psychology in the Mainland of China

Ma Wenju*

The psychological experiments made on the oharacter recognition in the mainland of China since 1980's include the following aspects. First of all, scholars from the mainland of China, Hongkong and Taiwan attended "the First national Symposium of Character Psychology" held in East China Normal University (Shanghai) in 1984, in which the representatives discussed penetratively how to solve the difficulties of character recognition and information processing. Secondly, cognitive experiments have been made on recognizing the shape, sound and meaning of characters. Thirdly, researches have been made into the recall of character. Fourthly, experiments were made on the individual diversity of character recognition.

Methods concerning the teaching of characters have been changed in the mainland of China since 1980's. The first method is named concentative recognition. In teaching, the students are made to pay great attention to the same radicals which characters share and distinguish their different radicals, which identifies with the theory of gestalt psychology. Belguan Elementary School in Liaoning province has proposed a suggestion. That is, recognizing concentratively, reading profusely and practising gradually. The second method is that of decentralizing recognition. Mrs Si Xia practised presenting and explaining unfamiliar characters and words in context, combining character with words and integrating words into sentences, by doing so, the students can be activated. The third method is called "recognizing characters with pinyin, forward reading and writing". This method was practised in Helongjiang. It changed the traditional practice in which the recognition of character was followed by reading. In Helongjiang, the idea that reading and recognizing should be carried out simultaneously has been advoated. The fourth method is that of classification. The fifth method is that of eclectic one.

一、八十年代中国大陸識字心理学実験の新展開

大陸識字教育は識字心理学の実験研究を科学的根拠とするとともに，優秀な小学国語教員の経験を総括するものである。80年代以前の中国語文の心理学研究は，高尚仁教授がかって系統的に紹介した文を著したので，ここでは重複を避けることにする。

（一）第一回全国漢字心理学学術会議

1984年，華東師範大学心理学科が主催した第一回全国漢字心理学学術討論会において，漢字の“初めて学習する困難”と“情報処理の困難”の問題について，激しい討論が展開された。沈龍明は『乳幼児

* 華東師範大学心理学科
Psychology Department East China Normal University
注：文中の＊印は，訳者注を示す

識字管見』という一文の中で，かれの実験に基づいて「漢字はピンイン（＊中国語のローマ字表記）よりもはるかに学習が易しい」および「筆画の多い字は必ずしも難しくない」という観点を示した。曲阜師範大学院生龔震偉の論文『四角文字と中国語ピンイン再認識のシグナル分析法比較』の最初の段階の結論は「四角中国文字は中国語ピンインに比べて記憶がより定着し，認識が易しい。四角文字の形の近似の方が音の近似よりも混同しやすい……」というものである。またある学者はその論文の中で「幼児の漢字認識の心理負担は小さく，書写しやすく弁別しやすい」，「これは漢字が事柄を記す画から発展してきた象形的表意文字だからである」と指摘している。大会席上，華東師範大学心理学科教授郭可教は『漢字と大脳 —— 漢字認知における神経心理学の問題』と題する学術報告を行った。かれはまず漢字の以下の基本的特徴を紹介した： 1. 音節と文字の一元化； 2. 常用文字の集中； 3. 同音字が多いこと； 4. 音義の結合した形声文字が多いこと。ついでかれは科学事実に基づいて漢字の認知には“語音ダビング”（形—音—義）方式のほかに，“相対的独立”した“形—義”連係方式があることを説明し，さらに進んで漢字自体の優越性を提示している。

50年代以前，計算機の理論と技術がまだ発達していない頃には，漢字の情報処理は確かに困難であった。しかし80年代電子計算機は世界を風靡し，漢字情報処理においても障害を突破した。会議は著明な科学者銭偉長教授の協力者の曹家麟氏を，会議の席上で漢字巨視字形コードを実際操作するよう特別招待した。また華東師範大学現代教育技術研究所大学院生の周修光に「漢字手写印刷ＬＡＴ特徴ランダム・サンプリング法」と“超半群代数構造およびその図形の文字識別中における応用”研究の進展についての要約紹介を要請した。会上，代表たちはかれが“モデル識別”の原理を運用して，電子計算機が識別難度がきわめて高い“贏”字や“巳・己・已”の三文字を識別することを可能ならしめるのを，興奮とともに実見した。80年代は，漢字情報処理技術は日進月歩をとげた。たとえば王永民氏の“五筆字型法”は，現在のコンピュータ設計の二十余のキーを用いて漢字を入力し，そのスピードはすでに英語の入力速度を越え，最高速度は毎分220文字以上に達している。1992年までに大陸における漢字コード設計案はすでに，700を越えている。

（二）漢字形・音・義認知実験

1. 漢字視知覚実験

中国科学院心理研究所の喩柏林等は20歳前後の大学生15人に漢字視知覚について，文字全体識別，構造方式の弁別・部分識別の三点の実験研究を行った（1990年）。三つの実験の結果の総合は，① 三種の非速示的特定知覚という課題のもとにあって，漢字認知反応速度の長さは次のようである。漢字のふたつの部分を識別する反応時間＞文字全体を識別する時間＞文字の構造方式を弁別する反応時間。錯誤率の指数も同様の結果を得た。② 構造が左右と上下の漢字については，その構造の弁別には差がなかった。③ 文字全体名を言うのにあたって，漢字の表層的属性，例えば構造方式や表音の特徴は，文字全体の識別には影響しない。このことは文字全体が正常な読書条件のもとにあっての知覚単位であることを表している。④ 文字全体を分解して知覚し，その部分を識別してその名を言うときには，上下構造の文字の反応時間は，左右構造の文字の反応時間よりはるかに長く，形声文字の反応時間と錯誤率は非形声字よりもはるかに短くまた少ない。錯誤の中には漢字全体を読みまちがえるケースが大量に存在する。これらの漢字の属性の効果は，すべて漢字知覚の分解過程の中において発声するものであり，これは文字全体の部分に対する強い影響を反映している。

2. 漢字読音実験

北京師範大学の舒華・張厚桀は15名の非語学専門系の大学生に対して二種の実験研究を行った（1987年）。実験 1. おもに字形が異なり頻度が異なる単独の漢字の読音過程についての研究。実験 2. 低頻度の漢字読音過程についての研究。二つの実験によって以下の結論を得た。① 成人が漢字を読む時には多くの人工的附加方式が存在する。高頻度の文字については主に直接摂取する。中頻度の文字では直接摂取がやはり重要な方式であるが，音符・類似といったテクニックが作用を増加する。低頻度の文字にあっては主に音符・類似のテクニックに頼るようになる。② 字典中のいくつかの特徴の相似する文字を活用して，文字の読音を考慮するのは低頻度の文字の読音にあたっての一つの重要な方式である。③ 知識とテクニックは成年で熟練した読者の漢字読音において重要な作用を行う。

3. 漢字字義実験

中国科学院心理研究所馬謀超は区間統計のファジー統計方法を採用して，量詞と分類詞について字義賦与値の実験研究を義った（1990年）。（省略）

北京師範大学心理学科張積家等はスピード分類の方法を運用して，漢字の一字語の字義摂取について二種の実験研究を行った。実験 1. 漢字義符の漢字字義摂取中における作用の研究。実験 2. 語の頻度と字義との距離の字義摂取における作用の研究。実験の結論は ① 漢字字義の摂取は二つのネットワークに関わる。ひとつは語彙ネットワークであり，ひとつは字義ネットワークである。② 語彙ネットワークにおいて漢字の構造の特徴 —— 形声字の義符は字義摂取の中において重要な作用を行う。この作用は肯定的反応と否定的反応の療法に存在する。この作用は促進と妨害とに分けることができ，字義と義符が一致したとき，促進作用を起こし，字義と義符が一致しないときは妨害作用を起こす。義符の作用は漢字の形態コードに基準を提供する。③ 字の頻度は漢字の字義摂取にやはり重要な影響を持つ。その他の条件の制御のもとにあって，高頻度の文字は低頻度の文字に比べてより速やかに決定される。④ 字義の距離もまた反応時間を決定する重要な変数である。その他の条件が一定の時，上に属する字義かあ距離の近い文字はより早く決定される。⑤ 字義の距離と文字の頻度は字義摂取の時間を決定する相対的に独立した変数である。

（三）識字記憶実験

1. 張武田等は三つの実験研究結果を用いて明らかにした（1987年）。

筆画の簡単な文字は筆画の複雑な文字に比べて記憶範囲は大きいことが必要である。指摘しておかなくてはならないのは，この結論は絶対ではない。

2. 中国科学院心理研究所彭瑞祥・張武田は情報加工の角度から，実験的方法を用いて速示条件のもとにおいて，漢字の再認識の特徴を研究した（1984年）。① 半包囲型の文字の正確率は比較的低い。② いくつかの部分から，特にその部分が斜線と曲線から組成される文字は，しばしば再認識が困難である。

3. 福建師範大学楊爾衡・連嶸はシグナル測定論を手段として，さまざまな相似程度の文字の再認識について実験研究を行った結果，次の事を発見した（1981年）。① 読者の一致および相似は，混同の重要な原因を作る。字形の相似あるいは字義の近似は，読者の一致および相似と結合してはじめて混同をもたらす。② 同じ字義の認識記憶方法は識別効果は比較的良好である。

4. 喩柏林は実験語彙表のコード方式を組織程度の高いもの・中間型・無組織の三種類に分けた（1985年）。実験結果は ① 漢字の組織コードをもつ方式は組織コードのない方式に比べて，短時間で記憶するだけではなく，長時間の記憶を保ち，とくに長時間の記憶条件において，比較的高い記憶保持量と比較的低い忘却速度を示す。② 組織程度の高いコード方式は組織程度の低いコード方式に比べて回憶の点，とくに記憶保持量の上で有利である。③ コード方式の系列位置の曲線は，短時間の獲得量の方面では，コード方式は二次記憶の成績に影響を持つが，初歩記憶には影響しないことを示す。三種のコード方式のもとにあって二次記憶は基本的に変化はなく，初歩記憶は明かな下降を示す。

（四）識字差異実験

1. 北京師範大学李忠忱は自分の娘，李璟琳に対して13ヶ月から識字実験を開始し，満24ヶ月ではあわせて1000字を識った（1988年）。実験は嬰児の識字の心理の依拠しうるところを示している。① 図形弁別力が嬰児の識字の基礎である。② 第二シグナル系統が初歩的に嬰児識字の根本条件を形成する。……この実験と沈龍明の研究とは相互に補填しあうものである。

2. 黄仁発等は現行の小学５年の国語読本の3075新出文字表を材料にして，小中学生に面接測定を行って，以下の初歩的結論を得た（1985年）。小学１年・３年・中学２年は識字に鋭敏な時期である。中小学生の識字は文化背景の制約を受け，都市と農村の差が現れ，その差は量にあって，質にはない。性別の上では，小学４年までは，男が女にまさり，５年以降は女が男にまさる。

3. 黄仁発等は北京・吉林・広東・福建・安徽等の地の中小学生1952人に語句発展についての実験的測定を行い，すこぶる意義のある結果を得た（1986年）。① 語には二重の意味がある。すなわち語彙意味と文法意味である。この二種の意味は言語環境の中にあって弁証的であり，発展の過程にあって互いに促進し，必ず歩みを同じくする。生徒に語彙意味を理解させるのと同時に，必ず文法意味を把握させなくてはな

らない。② 中小学生の語句発展は二方面からの制約を受ける。第一は言語環境による制約であり，段・句中の語句の掌握は容易であるが，単語は難しい。第二は語の性質による制約であり，実字の掌握は容易で，虚字は難しく，虚字のなかの介詞・副詞はさらに難しい。③ 中小学生の言語発展の都市と農村の生徒間の差はかなり明確であり，男女間の差は明確ではない。中学２年と高校２年は語句発展の低潮期であるが，都市の生徒の低潮は明確であり，農村の生徒の低潮はそれほど明確ではない。男子は明確であり，女子はそれほど明確ではない。

二、八十年代中国大陸識字教育方法の新発展

（一）集中識字・総合訓練

遼寧省黒山北関学校の“基本字帯字”識字方法。なにが基本字か？基本字とはひと組の合体字（＊へんとつくりなど二つ以上の部分で構成される文字）の中で，字形構造において共通して備わり，そして最も基本的であるような字である。たとえば“权（＊権）・劝（勧）・欢（歓）・叹（嘆）”というひと組の字のなかで“又”字は基本部分であり，基本字と呼ぶ。多くの基本字は独体字（＊ひとかたまりになっている字）であるが，若干の合体字も存在する。“基本字帯字”の最大の長所は形声字・非形声字と簡化された漢字の制約を受けないことであり，文字の帰属範囲を拡大させる点である。字形の構造では，同じ中に差異がある。教育にあたっては“同”を把握し，“異”を明確にし，同時に漢字の特徴を十分利用して識字教育にあたらなければならない

基本字帯字の実験。西北師範学院劉寅倉は付属小学１年52人に実験を行った結果，指摘している（1984年）。① 新しい授業過程の語，聞き取りの成績は音読・解釈に比べて劣った。既知の基本字から生まれた字の成績は，未知の字の基本字から生まれた字の成績にまさった。② 単元学習が終わり，系統的に組織復習する前では，聞き取りが最も劣り，字形の忘却率が最も大きかった。③単元学習が終わり，系統的に組織復習した語では，基本字帯字は読音・解釈・聞き取りのいずれも，成績はすべて大幅に向上した。

黒山北関実験学校は30年にわたる反復試行の結果，小学国語教育の新しい体系を創った。その基本内容は“集中識字・大量閲読・段階作文”であり，集中識字は国語教育の新体系の重要な組成部分となっており，集中識字教育の過程において，聞く・言う・読む・書くの総合訓練を行っている。

“新体系”は低学年にあっては識字に重点をおき，“基本字帯字”を主要方式とする集中識字法を採用して，児童が入学した後，二年間に2200～2500の常用漢字を集中学習し，さらに識字と同時に聞く・言う・読む・書くの総合訓練を受けさせるのである。

目下，“集中識字・大量閲読・段階作文”という教育改革実験は，着実に発展している。

（二）“教科書テキストによる分散識字”

1958年秋，斯霞教師は小学５年の教材を教えはじめるにあたって，多くテキストを読み，多くテキストによって分散識字するという方法を採用した。1982年，斯霞は“テキストによる識字”という論文を発表しそれについての経験を系統的に総括した。この識字法の特徴は，“新出単語の出現と解読をともに具体的な言語環境の中で行い，‘字は語を離れず，語は句を離れず’とする点にある。”斯霞は次のように認識する。児童が入学したはじめ，識字教育の重点は字音と字形にある。中国語ピンインの学習と字形構造の基本規律を把握する訓練を経て，児童は基本的にピンインの助けを借りて，正しい字音で読み，漢字の知識を利用して字形を分析することができる。しかる後，識字の重点は字義に転ずる。そして字は単語となってはじめて概念を表すことができ，単語は句のなかにおくことによって，比較的抽象的なものも比較的具体的になり，含義も深くなり，比較的通俗で理解し易くなる。字義が理解でき，義と音・形に統一した連係が建てられらば，字形の把握にも助けとなる。斯教師は新出単語をテキスト中の句と連係させて教え，生徒は比較的容易に適切にそれらの単語の含義を把握する。この分散識字法で具体的に一課一課のテキストを教えるとき，単語を先に教えるか，それとも直接テキストを教えるかという点については，斯教師は普通両方の処理方法を採った。テキストが比較的短く，新しい文字・単語が多くないときには，新字とテキストの内容を結び付けて教え，テキストが比較的長く，新しい文字・単語も多いときには，まず新しい文字・単語を教え，それからテキストを読むという方法を採用した。“教科書テキストによる分散識字”は生徒に関連する漢字規律の知識を教えることができるであろうか？斯教師は授業に当たって，出現した新字と結合させて，機に

応じて文字構成規律の教育を行った。若干の課のテキストを学んだ後，漢字の構成の特徴を利用して，さまざまな字・単語を分類する練習を行い，よい効果をおさめた。

北京師範大学張素蘭・馮伯麟は集中識字と分散識字とを対比する実験を行った（1985年）。その結果，① 集中識字では，教室の場で自立性をもつか中間水準の生徒は，依存性の生徒よりも顕著に優れる。場に依存する生徒は集中識字に適応せず，場で自立する生徒は集中識字に適応する。② 場に依存する生徒は分散識字に適応する。③ 中間の水準と場に依存するタイプの生徒は，両方の教育方法に顕著な偏りはない。

（三）“注音識字・事前読み書き”

いかにして中国語ピンインの小学生の言語学習にたいしての作用を十分に発揮させるか？

黒龍江省では1982年９月から，チャムス市第三中学・拝泉県育英小学と訥河県実験小学の１年生のクラスで“注音識字・事前読み書き”国語教育改革実験を開始した。改革案の全体の構想は，中国語ピンインをよく学び，その多くの効能作用を発揮することを前提にし，言語を発展させ，国語を学ぶなかで漢字を体系的でなく識ることを原則とするものである。児童が入学してまもなく，まだ漢字を識らないか識っている字が多くない状況下で事前読み書きと閲読と作文とを同時に開始し，密接に関連させ，相互に促進させるやり方を採用して，児童の言語を発展させ，聞く・言う・読む・書くの能力を発展させ，児童の知力を発展させるという目的を達成する点にある。

実験は絶えず発展した。その主要なやり方は，低学年ではピンインを代用的書写の手段とし，生徒が言葉を綴り，文を作るのを助けるのである。一定の時間に集中してピンインを教えると，ピンインを利用して閲読・作文・識字の授業を開設し，交差させながら教育を進める。方法としては，閲読を始めるのに，まず純粋にピンインのテキストを教え，続いてピンインをつけたテキスト（注音テキスト），難字にピンインをつけたテキストを教え，最後に漢字だけのテキストを教える。作文の授業では，まずピンインで言葉を書かせ，続いてピンインと漢字を両方使って言葉を書かせ，最後に漢字だけで作文させる。この実験はピンインの作用を利用して，伝統的な国語教育の“まず字を識って，それから読書”を“読書しながら，字を識り”，読み書きのなかで体系的でなく漢字を識る方法に変えたのである。かれらは教育のなかでまず350典型字をきちんと教えるとともに，生徒に漢字の構造の初歩的な規律を教え，生徒が独りで字を識り，字を書く能力を養成するのである。同時に以下の三つの道を通して識字教育を進める。一は大量の教科書テキスト内外の閲読を通して重点的に“識る”という問題を解決し，また一定の言語環境のなかで生徒に字義を理解させる。ピンインで閲読した後，注音テキストに入るとき，識字教育も始まる。閲読教育において教師はそれぞれ異なる段階に応じて指導を与える。注音テキストを閲読し始めた初期には，生徒にピンインも読み，漢字も読むよう注意して指導する。生徒が一定の識字量を得た後は，生徒が主として漢字を読み，副次的にピンインを見るように注意して指導する。漢字だけのテキストを読むようになったときには，児童が独りで字典を調べ，新字の問題を解決するよう注意して指導するのである。二には書字授業を通して，漢字の書写の規律を把握させ，重点的に“書く”問題を解決する。書字授業は主として児童に漢字の筆順や筆画の配りなどの構造の規律を把握するよう教え，児童がまじめに，整った漢字を書くための基礎を作り，同時に識字に対しても一定の強化作用を及ぼす。三は作文実践を通して，重点的に“用”の問題を解決するのである。

それゆえ，かれらは“この教師のいる指導と教師のいない会得とを結合し，国語を学ぶ（主に大量閲読）なかで，体系的でなく漢字を識る識字方法は，‘ふと柳を植えれば，柳，蔭となる’という「多く，早く，よく，むだなく（＊20年前の中国のスローガン）」やる識字方法であり，中国語文学習の規律に符合し，まことに‘教育は教育しないためのもの’という教育思想の識字教育における到着点である”と認識するのである。

目下，“注音識字・事前読み書き”教育改革実験は大きく発展している。実験を堅持し，実験を完全にし，実験を拡大するために，国家教育委員会基礎教育局李仲漢氏は一文を草し，「積極的に教育研究工作を改革するためには，先ず実験中で提出されたいくつかの共同問題あるいは個別問題を研究し解決しなければならない。例えばいかにして質を高め負担を

軽減するか，ピンイン教育にあってはいかに難度を低下させ，難点を分散させることができるか，識字教育にあってはいかにして数を保ち質を高めるか，大量閲読の閲読量はいかにして合理的に掌握するか，教科書とそれ以外の閲読はどのように配分するか……等の問題は，ともにさらなる研究をまつものである」と指摘している。

（四）分類識字法

分類識字法は，字義を核心とし，音・形・義を結合させた集中識字法であり，文字の科学的分類系統に基づき，自然教育と識字教育とを同時に進行させる教育法である。この方法は安徽省徽州師範学校の黄剣傑の創造にかかるものである。かれらが立案した文字の科学分類系統は，まず物質を分類し，それから漢字すべてをその本義・部首・物属により，その進化の順序にしたがって62類 214 部にわけるのである。部の下は名・形・動・虚の 4 系に分け，系の下は若干の組に分ける。文字は組みの中で一定の順序にしたがって排列される。例えば，動物は“虫・魚・鳥・獣”の 4 類に分かれ，獣類は“犬・豸・虍・鼠・馬・牛・羊・豕”の 9 部に分かれる。“猴猕猢狖狙猱猿猩狒”は獣類犬部名系猴猿組に属する。このような排列は文字と文字の間の連係・対立・転化関係がすべて弁証的に統一体中に存在し，ひとつの明晰な図を構成するのである。

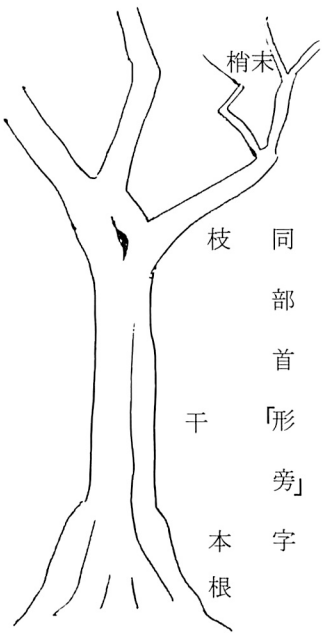
字義の分類は字形の部首分類を包含する。これはひとつの主分類線である。そのほかにさらにひとつの副分類線がある。副分類線には音符を同じくする形声字が並ぶ。例えば“包”の同音字には“胞苞孢鮑雹飽刨抱鮑”があり，同韻字には“咆狍庖袍匏跑泡炮疱”等がある。音符のもとの字とそれが組成する形声字とは，音の関係があるだけでなく，意味の関係があるものもすこぶる多い。例えば，“胞・苞”は“包”と意味上のつながりがある。このような分類は，文字の形と音が義を核心としてひとつの体を形声する。その結合図式は下のごとくである。木部名系本体組：

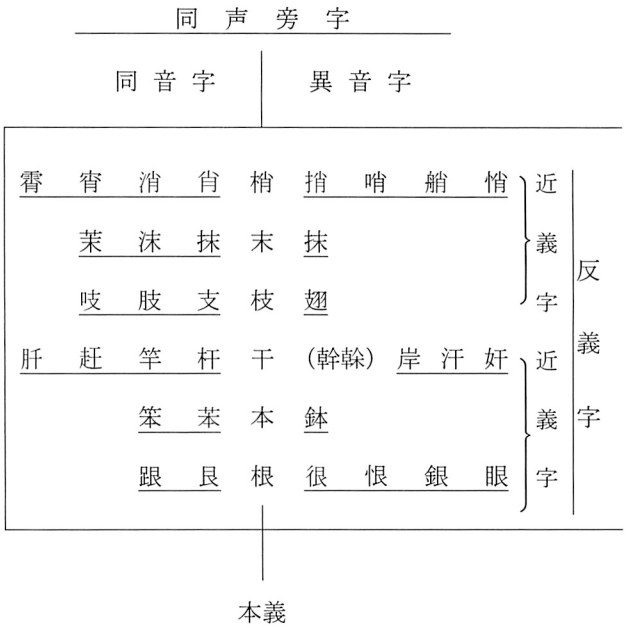
漢字分類系統にしたがって，識字教科書『図解識字』シリーズと『分類字典』が編集された。『図解識字』は 5 分冊で，例えば第一冊は常用の部首と簡単な文字が 120 字が並べられ，3 字が一組になっていて，それぞれ相当する図がこの 120 字は漢字の組成規律と基本組成単位を包括し，全冊が三つの部分に分かれている。

（五）複数方法識字

1978年以来，人民教育出版社は全国共通教材を改めて編集し，識字方面については，いままでの識字教育経験を研究して，“多種形式識字”を提示し，小学国語教科書の中で採用した。その主要な特徴は：

1. ピンイン教材を教育の最も基本的内容に改良し





た。生徒は入学して4週ほどで音節を読み，ピンインの助けを借りて新字を読むことができるようになる。

2. 識字の基礎をきちんとつくる。ピンイン識字・図解識字などの形式を採用して，6，70の単独文字を学習し，さらに漢字の基本的筆画・筆準の規則等の教育の進行と結合させる。これらの文字は多くが合体字の一部分であるから，やがて合体字の字形を分析する際の初歩的な基礎となる。

3. 識字と単語学習・句学習との結合に注意する“図を看て単語を学び，句を学ぶ”方法は単語学習の中での識字を体現していて，生徒が単語という概念をつかむ助けとなる。絵を借りて事物を認識し，単語の意味を理解し，初歩的な句の訓練を受けることができる。

4. 児童の識字実践において漢字の規律についていささかの感性認識を得た後，一定量の分類識字を用意する。比較的漢字の規律を提言している体現している字を選んで類分けを行う。字形の上でだけ関係があり，音・義では関係のない字は並べない。分類識字も単語学習と結合させ，あるものはさらに文字から単語そして句という排列をする。

5. 2年生から字典をひく訓練を開始し，自立して識字する能力と習慣を養うことを重視する。

6. 教科書テキストによる分散識字が識字の主要形式である。小学段階全体にわたって，識字は主に教科書のテキストの理解とともに進行し，識字と単語理解・テキスト理解とを結合させる。

7. 低学年の教材の中に一定の数の“二類字”を排列する。これらの文字は読めて代替の意味が分かることだけを要求し，書いたり用いたりできることを要求せず，生徒の自立識字を助ける。

“多種形式識字”は各方法の優れた点をとり，多種形式の識字教育の形式を利用する過程の中で文字の音・形・義間の統一連係を樹立し，同時に識字教育方法を重視して，識字能力を養う。この方法を採用することによって，生徒は二年間に1700字を掌握することができ，“二類字”を加えると，識字は2000字を越え，同時に初歩的な閲読と話をしたり話を書いたりする訓練を進める。

上述の何種類かの識字法以外に少なくないその他の識字方法がある。例えば，“循環識字法”“部分識字法”などである。

以上述べたところを総合すると，異なる識字方法はそれぞれその優れた点を持っている。しかしどの識字方法も漢字の形・音・義の特徴を注意して運用すれば，それぞれの識字方法の不足するところは克服するかあるいは補われる。例えば，“教科書テキストによる分散識字”は，やはり漢字分類包を利用して習った漢字を復習して定着する。“集中識字法”は，識字と単語理解・句理解との連係に注意する。“ピンイン識字”は教育のなかで漢字の書写などをきっちりと実行するなどである。

三、識字教育研究の展望

(一) 一歩進んだ科学的識字方法の探索

漢字文化研究の絶え間ない深化にしたがって，ひとびとの漢字の優越性に対する認識は，さらに明確なものになってきた。漢字文化は絶え間なく発展し，識字教育を改善し，識効率を高めるために広々とした展望を与えている。

香港の言語学者安子介氏は漢字想像の規律について深い造詣を持ち，現今の漢字の特徴に基づいて，初めて“部首切除法”を発明し，それはまた“斥字法”とも称される。かれは『漢字の謎の解明』という大著の中で，漢字に観念化と哲学化を与えるとに成功し，漢字の分解について輝かしい大道を開いて，“漢字は識りにくく，書きにくい”という伝統的観念の束縛から離れた。識字教育の質をさらに一歩高めるために，まず漢字自体が我々に提供する豊富なシグナルの研究に深く入らなくてはならない。例えば，漢字の形声の特徴を十分に利用して分類識字を進める。また例えば，古人の解字法を採り，連想法を用いて漢字の音・形・義の特徴を児童の認知構造と連結させる。これらはさらに深い研究をまつものである。調査に基いて，小学段階での識字量は2500字と定められ，これは児童の読み書きの需要を基本的に満足させるものである。もしわれわれがこの2500の漢字にたいして，適切な分析を加えるならば，児童の認識規律に依拠して，「多く，早く，よく，むだのない」識字方法の探索に歩を進めることができる。

(二) 海峡両岸（＊大陸・香港・台湾を指す）の使用文字統一問題

漢字の研究は近数年大きな発展を遂げた。しかし，使用文字問題の研究，とくに海峡両岸の使用文字問題の比較研究は，まだ注意する人が少ない。用字の

問題が与る面はかなり広範囲であり，大陸において解放政策が実施され，海峡両岸の政治・経済・科学・文化の各方面の交流が日に頻繁となるにつれて，使用文字の点で漢字の繁簡の矛盾はきわめて大きい。中小学校の国語教育の受ける影響もしごく明かである。大陸の中小学校で識るのは簡化文字であり，書くのは簡化文字である。しかし社会では到るところで繁体字と接触する。例えば，商店の看板，新聞の見出し，さまざまな文字の商標，さらには往復する手紙にも繁体字がまざっていて，生徒たちに語義の混同を起こさせる。そして香港・台湾の中小学生は，さまざまなチャンネルを通して，いくつかの大陸の簡化文字と接触し，それは学習に一定の困難をもたらしている。

国語形声の角度からだけ見ても，海峡両岸の文字統一の問題は焦眉の急を告げている。しかし比較的穏当に両岸の文字を統一することは一大事であり，共同の計画と決断が必要である。現在，社会が繁簡両漢字を同時に使用している状況に生徒たちを遅れることなく適応させるためには，積極的な措置を採って助けなくてはならない。大陸の中小学生が簡化字を識ると同時に繁体字を識り，そして香港台湾の方が同様に若干の簡化字を識って，文字の障害を減少させ，有益なシグナルを吸収できるかどうかが，それにかかっているのである。